

【短信】

目の前の子どもとともに

古旗 明

ん？ そろそろかな。…あ、くるかも…。きたっ！
学校現場を離れ、指導主事という現在の立場をいただいて、一年と数ヶ月になります。この間、その授業者の先生と子どもたちになんかしゃべらない貴重な授業ばかり参観させていただきました。だからこそ、参観には心を引き締めて臨みてきました。だからこそ、参観には心を引き締めて臨み、二十年近く前に教育実習で教えていただいた、「一人の子どもを丁寧に観る」ということを心がけています。
この「一人の子どもの姿を丁寧に観る」とは、何と難しいことであろうかと感じる日々です。

学生の頃から二十代くらいまでは、「その子の授業中の姿を追う」ことだと考えていました。「何時何分にノートに〇〇と書く」「教科書を開く」「□□と発言する」。観察記録には子どもの事実が羅列されました。それらを重ねながら、授業の終末に書かれた子どもの振り返りを読

むことで、その子の一時間の学びを自分なりに感じていました。

三十代になり、諸先輩に学びながら、「その子の行動の理由を探る」ことを大事にしたいと考えるようになりました。「ノートに〇〇と書く。なぜこう書くのか。なぜこのタイミングなのか」「教科書の◇ページを開く。なぜか。どの場面とつなげているのか」。観察記録には子どもの事実の下に「なぜ」という言葉が並ぶようになりました。そして自分なりの見解を交えながら、その子の一時間の学びを意味づけるようになってきました。

最近では、諸先輩に学びつつ、授業後に授業者の先生のお話を伺い、書籍にあたる中で、「その子の思考を捉えながら、授業の中で見えてきた問題や課題をもとに考えて、その授業を楽しむ」ようになりたいと考えるようになりました。「この子はどんな子なのだろう」「今、こう考えているのではないか」「きつと、こんな姿が出るかもしれない」。そんな視点で子どもの隣にいと、「くまれに、冒頭のような「きたっ！」に出会えるようになりました。そんな時、観察記録にはやや興奮気味に「だから〇〇しただのだ！」という文字がおどります。すると、本時・単元の学習に対する子どもがどのくらい、授業者の先生のねがいがどんなものか、自分なりに少し近づけるような

気がします。

まだまだ、「一人の子どもの姿を丁寧に観る」ことの本当の意味を探っている最中です。つかんだと思うとすると逃げていってしまうような感覚を何度も味わっています。また、目の前の子どもの思考を捉えようとするあまり、自分の独りよがりの考えに陥ったり、授業全体を俯瞰することで見えてくる部分に気付かなかつたりすることがたくさんあります。ましてや、目の前の子どもとともに、授業の中で見えてきた問題や課題について考えて、その授業を楽しむところには至っていません。

現在の立場だからこそ経験することのできる、多くの貴重な授業と先生方、そして子どもたちとの出会い。その出会いの中で自分を少しでも成長させることが、出会った先生方や子どもたち、私に教育の場にあることの素晴らしさを教えてくださった信州大学の先生方や諸先輩、仲間たちへの恩返しになると思っています。

目の前のこどもとともに。

道のりは遠く険しい上に、遅々とした歩みですが、一歩ずつ一歩ずつ、心を込めて、歩を進めていきたいと思えます。

(ふるはた めい 長野県教育委員会事務局北信教育事務所)